

見抜ころ 虐待の芽

SOSを發した子どもを救いきれない社会、孤立の中での妊娠や育児——。取材を通じ、児童虐待に共通する課題が見えてきた。その「芽」を未然に摘み、子どもたちを守ろうと地道に取り組む人たちがいる。



奪われる未来 6

病院と児相毎月情報共有

香川の病院

「子どもが転んで打ったと親が言うんですが、どう思いますか?」。四国どこもおとなの医療センター(香川県善通寺市)に昨年、自治体から相談があった。育児支援対策室長の木下あゆみ医師(42)は写真を見て、「転んだにしてはあざの数が多く不自然。早急に児相(児童相談所)に連絡した方がいいと思います」と伝えた。

センターは四国全体の周産期・小児医療の拠点病院。未婚や健診回数が少ない妊婦など、不安を抱えることが多い受診者を支える取り組みを長く続ける。育児支援外来では悩み相談にも応じ、子の発育に不安を

抱えている親の悩みを聞いたり、「産後うつ」のケアをしたりする。30代の母親は、娘の成長が遅いことに悩み、ミルク

を無理やり飲ませようとするなど「虐待と紙一重だった」。だが、木下医師が温かい言葉をかけ続けてくれたことで、「2人目が欲しい

と思えるようになった」。特徴的なのは、気になる親子の情報を、いち早く行政と共有する取り組みだ。センターでは毎月、近隣自治体や児相職員らが出席する「育児支援ネットワーク会議」が開かれる。リスクが高い親子の様子をセンターが報告し、行政側が家庭や学校などでの様子を伝える。木下医師は「虐待が起きてしまったら私たちの負けなんです。そこまで追い込まれないように親子を支援していきたい」と話す。(山田佳奈)